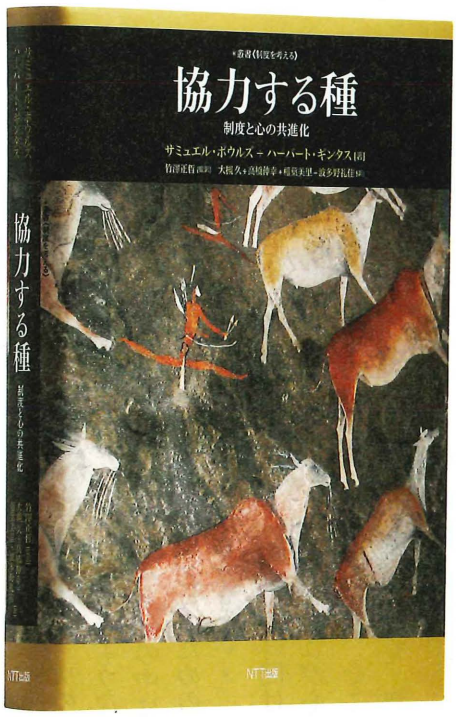

Review

01

叢書《制度を考える》協力する種
制度と心の共進化

サミュエル・ボウルズ、ハーバート・ギンタス 著／竹澤正哲 監訳　大槻 久、高橋伸幸、稲葉美里、波多野礼佳 訳

NTT出版
5000円＋税／453ページ

profile

Samuel Bowls
米マサチューセッツ大学（アマースト校）名誉教授、米サンタフェ研究所アーサーシュピーゲル研究教授・行動科学プログラムディレクター。1939年生まれ。

Herbert Gintis
米マサチューセッツ大学（アマースト校）名誉教授、ハンガリーのブダペストにある中央欧州大学教授、米サンタフェ研究所外部教授。1940年生まれ。

偏狭でない利他主義の社会は可能かを問う

評者　北海道大学大学院教授　橋本 努

1970年代にラディカル政治経済学の旗手として名をはせたボウルズ氏とギンタス氏。二人は90年代以降、「協力の進化」と呼ばれる新たなテーマに取り組んだ。その成果となる本書は、自然科学と社会科学の諸学を越境して生み出された学際的な金字塔。スケールの大きさといい、ビジョンの深遠さといい、たぐいまれな達成である。さまざまなシミュレーションモデルを組み立て、共同性をめぐる人類史を実証的に再構築するという壮大な試みだ。

特に興味深いのは、人間の利他心と集団間の戦争が同時に進化してきたという主張である。本書のシミュレーションモデルでは、人類はおよそ最初の300世代までは、利他主義者が少なく、他者に寛容な利己主義者が多かった。しかしそのために戦争も少なかった。ところが3万世代を少し超えると、突然「他の集団に対して好戦的な利他主義者」が増え、戦争も多発するようになる。集団間で戦争による淘汰圧が上昇し、偏狭な利他主義者の多い集団が生存競争に勝ってしまう。

シミュレーションをさらに繰り返していくと、システムの均衡点は二極化する。一つは偏狭な利他主義者たちが支配する集団同士の戦争状態。もう一つは寛容な非利他主義者たちが支配する集団間の平和状態である。

そこで著者たちは問う。偏狭ではない利他主義の社会はいかにして可能なのかと。

集団間の淘汰圧がなければ、利他主義は最適な行動指針とはいえない。利他主義者は集団内で低い利得しか得られないからである。利他主義は適応度の低い戦略である。ところが人はしばしば、適応度の低い行為をする。他者に同調して喫煙するのもその一例であると著者らはいう。

そこで「規範を破った他者に罰を与える」という道徳的な役割を引き受ける個人に注目してみると、罰を与えるコストは決して利得に見合わないのであるが、そのような利他主義者が多くなると集団は繁栄する。個人の適応度は低いが利他的な人たちが活躍する社会は、結果として集団としての適応度を高めていくことがある。

私たちの誰もが自分の適応度を高めようとすると、かえって集団適応度は下がってしまうだろう。そうした意図せざる結果を回避すべく、人類は適応度の低い人を自然淘汰せず、文化的なコミュニケーションを発達させてきたというのが本書の洞察だ。その規範的含意は広範に及ぶ。

目次

協力する種

第 1 章 協力する種
第 2 章 人間における利他性の進化
第 3 章 社会的選好
第 4 章 ヒトの協力の社会生物学
第 5 章 協力するホモ・エコノミクス
第 6 章 祖先人類の社会
第 7 章 制度と行動の共進化
第 8 章 偏狭さ、利他性、戦争
第 9 章 強い互恵性の進化
第10章 社会化
第11章 社会的感情
第12章 結論：人間の協力とその進化